



～ 夢ひとすじに ～

宮原中だより

自ら学び 心豊かに たくましく

平成 25 年度 第 8 号
平成 25 年 12 月 3 日 (火) 発行
さいたま市立宮原中学校
メールアドレス
miyahara-j@saitama-city.ed.jp
ホームページアドレス
<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>

「このとりのゆりかご」

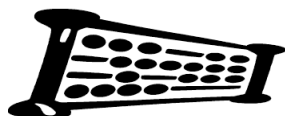
校長 ^{やました}山下 ^{せいじ}誠二

今年もあと1か月で終わろうとしています。生徒たちは、期末テストも終了し、3年生は、自分の進路を切り拓くために、学習に力が入っています。1・2年生は、生徒会の中心となり、また、部活動も張り切って活動しています。

11月28日には、「東洋の魔女」田村(旧姓…篠崎)洋子さんに講演をいただきました。当時の大松監督から受けた猛練習のDVDを視聴しながら、「自分に克て」という演題で、高校時代や全日本の選手時代の貴重なお話を伺うことが出来ました。すべての生徒が引き込まれるように話を聞いていました。中でも、高校時代の顧問の先生から受けた心の中での葛藤や野球部の顧問の先生からの一言で自分が大きく変わった話が印象的でした。また、バレーボール部の練習にも参加していただき、部員たちも感激している様子でした。

さて、またまた熊本の話で恐縮ですが、11月25日に平成25年度文化庁芸術祭参加作品・テレビ未来遺産ドラマ特別企画「このとりのゆりかご～赤ちゃんポストの6年間と救われた92の命の未来～」と題し、親の事情で育てられない赤ちゃんを預かる“赤ちゃんポスト”を開設した熊本県の民間病院「慈恵病院」の人々の熱き闘い、その実話をもとにドラマ化されたテレビを見ました。熊本県内で相次ぐ嬰兒遺棄事件に心を痛めていた看護部長と理事長は、事情があって子育て出来ない親が匿名で赤ちゃんを預けられる施設を作ることを決意しました。しかし、その前例のない取り組みに警察や市は難色を示し、マスコミや世間からも安易な子捨てを助長するとの批判が相次ぎました。それでも看護部長らは、妊娠を誰にも相談できず放置する親や、子を育てる気のない親によって赤ちゃんが危険にさらされる前に、「とにかく命を救いたい」その思いを前向きに、根気強く訴え続け、その甲斐あって熊本市長の了承を得て、ようやく実現にこぎつけたのでした。運営が開始されるとゆりかごには、年齢も抱える事情も様々な母親が全国から赤ちゃんを預けにやってきました。関東に住む高校生が、「このとりのゆりかご」のニュースを目にし、自宅で一人出産した後、赤ちゃんを抱いて病院へ駆けつけた時など、スタッフはそんな一人一人に温かく寄り添い、母親と赤ちゃんが最も幸せになれる道を共に考えてゆくドラマでした。出生前診断によって、命の選別が当然のように行われるようになった今の時代に、「生まれてくる赤ちゃんは、すべて宝物」と、赤ちゃんの命を守ることに人生を捧げ、すべての赤ちゃんが幸せな未来をつかめるよう、困難から決して逃げることなく立ち向かい続けている人にたちがいます。賛否両論あるかとは思いますが、全ての子どもが、自分を生んだ親から大切な存在(宝物)として扱われてほしいと願います。そして、「社会」で生きていく長い人生には、辛いことも嫌なこともたくさんあるかもしれませんが、できる限り楽しいことを記憶して、いつか結果的に「生まれてきて良かった」と思うことができれば素晴らしいと思います。

悲しい時や辛い時って「シクシク」って泣きますよね。それから嬉しい時や楽しい時には「ハハハハ」って笑いますよね。それを九九にすると「 $4 \times 9 = 36$ 、 $8 \times 8 = 64$ 」で、答えを足すと100になります。これを人生に置き換えて、人生を『100』とすると悲しい事は『36』嬉しい事は『64』って事になります。つまり、いくら悲しい事があっても、笑って過ごせる日って悲しいことの倍近くあるって事なんです。



どんなに号泣しても半分以下 「 $5 \times 9 = 45$ 」
「人生泣き笑いで100」